2
【ひろばの風】
ともに育つ心
人間健康福祉学部　山本 万喜雄

3
【Campus News】
国際姉妹校：静修女子高級中学（台湾）を表敬訪問
学生ボランティアセンター主催の講演会を開催
第12回ボランティアウィークを開催
国際姉妹校：静修女子高級中学（台湾）の教員・学生が来学

4
【Campus News】
聖カタリナ大学剣道部が男女で
全日本学生剣道大会に出場決定

4
【クラブ紹介】
軟式野球部
部長　人間健康福祉学部２年
木原 勝士さん

カタリナ ひろば

Vol.27 No.1
2014.11

聖カタリナ大学
聖カタリナ大学短期大学部
www.catherine.ac.jp

Amor et Veritas
SCU

5
【ESSAY】
トノサマバッタと
父親の選択肢
人間健康福祉学部　釜野 鉄平

6
【ゼミナールインタビュー】
人間健康福祉学部
高杉 公人ゼミ

7
【ようこそ就職課へ】
いざ、出陣!!
～変われ 変われ もっと変われ～
就職課長　井上 尚幸

8
【教員著書紹介】
読む力が未来をひらく―小学生への読書支援
脇　明子 著／小幡　章子（聖カタリナ大学短期大学部助教
執筆担当部分：第10章「ボランティアでもできること」）
：岩波書店、2014年
権利擁護と成年後見制度（第２版）
山本　克司（聖カタリナ大学教授　執筆担当部分：第三章
「日本国憲法の理解」）：みらい、2014年

ともに育つ心

週刊「授業通信」

人間健康福祉学部　山本　万喜雄

かすかな光へ　　谷川俊太郎

あかんぼは歯のない口でなめる
やわらかい小さな手でさわる
なめることさわることのうちに
すでに学びはひそんでいて
あかんぼは嬉しそうに笑っている

言葉より先に　文字よりも前に
波立つ心にささやかな何故？　が芽生える
何故どうしての木は枝葉を茂らせ
花を咲かせ四方八方根をはって
決して枯れずに実りを待つ

子どもは意味なく駆け出して
つまづきころび泣きわめく
にじむ血に誰のせいにもできぬ痛みに
すでに学びがかくされていて
子どもはけろりと泣きやんでいる

私たちは知りたがる動物だ
たとえ理由は何ひとつなくても
何の役にも立たなくても知りたがり
どこまでも闇を手探りし問いつづけ
かすかな光へと歩む道の疲れを喜びに変える

老人は五感のもたらす喜怒哀楽に学んできた
際限のない言葉の列に学んできた
変幻する万象に学んできた
そしていま自分の無知に学んでいる
世界とおのが心の限りない広さ深さを

（「朝日新聞」2008年1月1日付）

子どもの発達を学ぶ者にとって、この詩は忘れがたい作品です。「なめる」とか「さわる」とか皮膚感覚を含む五感ゆたかに育てることは、とても大事です。「知りたがり」屋さんは、やがて「問いつづけ」る青年に成長していくことでしょう。

あたりまえのことですが、発達の主体は子ども自身であり、親は子どもの育ちを代わってやることはできません。育つということは巣立つことなのです。とは言うものの、その育ちには他人の手助けが必要になります。親や仲間の力に支えられていることに気づかなければなりません。

一方、大人たちには子どもの育つみちすじに沿った念入りな配慮が必要ということを知ってもらわなければなりません。子どもの育つみちすじとは、転びながら転びながら転ばなくなるという能力獲得の道なのです。失敗は成長のもと。それ故、私たちは彼（彼女）らのつまづきこそ、見守る必要があります。まさに愛するとは耐えること。こうした子育てによって、親（教師）が親（教師）になるのです。その際、仲間の力は大きいものがあります。

仲間の力を信じるといえば、この40年、授業の感想を綴った週刊の「授業通信」を発行してきました．本学では、保育学科の「発達心理学」および社会福祉学科の「障害者の心理」で、たしかな表現力をもった主権者に育ってほしいという願いを込めて、「授業通信」をつくっています。書くことは考えること。その中で学生の皆さんは、素敵なイラストや文章を表現しています。

- ◆「みんなの感想を読んで、自分の知識にしていこうと思いました。もっと考えてレポートを書くようにしようと思いました。」
- ◆「授業通信を読んで思うことは、みんな、こんなことを思っているんだ。自分と同じことを思っている人もいるんだなと思い、一つのことでもいろんなとらえ方ができること、共感できることはとても楽しいなと思いました。授業の楽しみの１つでした。」
- ◆「毎回毎回時間をかけて、授業通信を作ってくださってありがとうございました。後期になると実習があるので、この講義で学んだことを覚えておきたいです。」
- ◆「もう１度生き方を、自分を見直さなければならないと思った。」
- ◆「差別のない、平和な世界を！」

このようなキラキラ輝くことばが、「授業通信」の紙面にはあふれています。

学習の基本は独習だと言われますが、大学でともに学びあい、育つ心は美しい。学ぶよろこびとは、①世界のひろがり、②仲間のつながり、③新しい自分の発見です。

あなたも聖カタリナ大学で、「ともに育つ心」を味わってみませんか。

Campus News

国際姉妹校:静修女子高級中学(台湾)を表敬訪問

6月5日(木)～7日(土)、ホビノ・サンミゲル学長、坂原 明 人間健康福祉学部長ら学内関係者3名が、国際姉妹校の静修女子高級中学(台湾)を表敬訪問しました。また、学長と学部長が本学における科目等履修生を希望する生徒の面接を行いました。これらの科目等履修生の皆さんは、平成26年9月から平成27年3月までの間の履修生を経て来年4月に本学への入学を予定しています。

静修女子高級中学と本学園は、本学園が四年制大学を設置する以前から国際姉妹校として親密な交流があり、同校の生徒の皆さんは定期的に本学へ来学し、授業体験、文化研修等を行っています。

現在、静修女子高級中学出身の11名の学生が本学に在学し勉学に励んでいます。

学生ボランティアセンター主催の講演会を開催

7月3日(木) 16:10 ～ 17:40に学生ボランティアセンター主催の講演会が開催されました。

「きっかけバス47」愛媛県チームリーダーをつとめた本学卒業生の徳永光勇輝さんを講師にお招きし、愛媛県チームの活動報告を行っていただきました。

東日本大震災3年後のボランティア活動を経て、深く悩み考え仲間と語り合った中での講演の言葉には、人への思いや命の大切さが感じられました。

第12回ボランティアウィークを開催

7月5日(土)に第12回ボランティアウィーク公開イベントが開催されました。

ボランティアウィーク公開イベントでは、福祉施設や学生によるチャリティバザーやフリーマーケット、各サークルによる発表など、楽しいイベントが行われ多数の方々にご参加いただきました。

ご来場いただきました皆様を始め募金活動にご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

当日、各ブースの募金箱等へいただいた募金及び収益金(108,115円)は、福島県浪江町役場と松山市社会福祉協議会に寄附させていただきました。

国際姉妹校:静修女子高級中学(台湾)の教員・学生が来学

7月10日(木)～7月11日(金)に台湾の静修女子高級中学(国際姉妹校)から教員・学生28名が来学されました。

初日は、大学の施設見学(図書館、学生食堂、サルーテ等)、浴衣の着付け、部活動見学(剣道部)、体育館でレクリエーションを行い大学の雰囲気を体験しました。

また、学生食堂で行われたウェルカムパーティーでは、本学学生、教員との交流も深めることができました。

2日目には、大学・短大の授業体験、琴の演奏、茶道の体験等の異文化体験を行い、日本文化にも触れていただきました。

聖カタリナ大学剣道部が男女で全日本学生剣道大会に出場決定

第61回中四国学生剣道優勝大会・第41回中四国女子学生剣道優勝大会が8月31日（日）に岡山市総合文化会館において行われました。

男子は第五位、女子は第三位に入賞し、男女ともそれぞれ全日本学生剣道優勝大会・全日本女子学生剣道優勝大会に出場が決定しました。また、吉野瑶平さん、菅優樹さんが優秀選手賞をいただきました。

CATHERINE

クラブ紹介

軟式野球部

私たち軟式野球部は、選手28名マネージャー8名の36名で火、水、金と週3回で4時間程度の練習をしており、指導者などはおらず、学生主体で練習に励んでいます。

今年の7月に行われた四国インカレでは優勝することができました。昨年9月の秋季リーグでは5位、今年4月の春季リーグでは6位と悔しい思いをしてきました。インカレまでの間は全員が高い意識を持って練習に取り組み、ただ反復練習するのでなく、課題を持って取り組むことによってチーム全体の成長が見られました。その結果、インカレ優勝に繋がったのだと思います。インカレ優勝に自信を持つとともに、謙虚さを忘れず部員全員が切磋琢磨しながらこれからも練習に励みたいと思います。

また、大会での勝利を目標とするとともに、今まで野球をしたことがない初心者の人に優しく指導して、野球の楽しさをわかってもらうようにもしています。今現在、大学から野球を始めた部員は2名おり、入部した当時に比べると本当に上手になりました。他の部員に優しく指導してもらえる、野球のやりやすい環境があるからだと思います。これからも技術の向上とともに、楽しく野球をすることを大事に活動していきたいです。

このように、野球を楽しむことを大事にしながらも、全国大会出場を目指して練習しています。高校生の皆さんも一緒に練習に励み、全国大会出場を目指しませんか。経験、未経験関係なく、野球が好きな方の入部を心待ちにしています。

部長　人間健康福祉学部2年　木原　勝士

CATHERINE ESSAY

トノサマバッタと父親の選択肢

人間健康福祉学部　釜野　鉄平

今年の4月から聖カタリナ大学で教鞭をとらせて頂いている釜野と申します。よろしくお願いいたします。社会福祉士や介護福祉士の養成に携わって11年目になりますが、講義の際は常に“日常の選択肢”を重要視しています。「社会福祉サービスを必要とする方たちが、自分らしく“日常”を過ごすためには何が必要なのか？」これは簡単なようでとても難しい問題です。

例えば朝ごはんはパンとお米のどちらにするのか、さらにパンであればバターを塗るのかジャムにするのかであったり、今日は外出の予定は無かったけど、天気が良いから本屋まで行こうかなど、私たちは意識こそしていませんが、自由に選択できる選択肢がたくさんあります。一方で高齢者や障がい者など、様ざまな障壁のために満足な選択ができない方もたくさんいます。そのような方たちのために社会福祉は何ができるのでしょうか？

普段はそのようなことを考えているのですが、ここでは自分自身の選択肢に関する出来事について書かせていただきたいと思います。

私の家は田んぼと畑に囲まれた場所にあります。5歳になる息子と一緒に7月の中頃に家の隣にある畑でバッタ取りをしました。小一時間ほどでショウリョウバッタやツチイナゴのほか、キリギリスなどを6匹ほどつかまえることができ、最後につかまえたトノサマバッタには息子も大喜びでした。

それらを虫かごに入れてやると、翌日から息子は保育園へ行っている時間以外はいつも庭に出て、虫かごを膝に抱えて大切そうにバッタを眺めていました。

数日過ぎたある日、虫かごを洗うことにしました。掃除の前に仮の住まいにした箱へ一匹ずつ引っ越しさせることにしたのですが、逃げようとするためなかなか捗りません。悪戦苦闘している私の横で、息子が「あ！」と叫んだので、振り返ると…ピョーン…ブブブブブ……。

最後に残しておいたトノサマバッタが、畑に向かって空高く飛んでいってしまいました。

“空高く”という表現は大げさに聞こえるかもしれませんが、トノサマバッタは足のジャンプと同時に羽を羽ばたかせるため、実に数十メートルは飛ぶことができるのです。

話を戻しますと、息子は飛び去った姿を見つめて立ち尽くしています。その姿が次第に小さくなるにしたがって、今にも泣きださんばかりに表情がくちゃくちゃになっていきます。

そんな息子の姿を見た私に、父親の選択肢が三つ発現しました。

①「バッタもお家に帰りたかったんだね。虫かごで格好いいところを見せてもらったから見送ってあげようね」と諭す。
②「また今度一緒につかまえよう」と今回は諦めさせる。
③再びつかまえるために飛び出して追いかける。

今思えば他にも選択肢はあるように思いますが、皆さんならどうしますか？

私は③を選択しました。

①を選ぶことも頭を過りましたが、良く言えば優しく悪く言えば気の弱い息子に、諦めずに飛びかかっていく姿を見せたかったのです。

庭と畑には1メートルほどの段差があるため、いつもは痛めている膝を庇って迂回をするのですが、悠長なことはしていられません。

畑に向かって力一杯飛び降り、走りだしました。

飛び去る姿を目で追っていたので、20メートルほど行ったところでどうにか見つけることができました。息を潜めて近寄り、両手で包み込もうとした瞬間、トノサマバッタはまた勢い良く飛び立ち、畑の反対側へ行ってしまいました。全力で追いかけましたがそこでも逃げられ、次は農道へ、更に隣の畑へと何度も取り逃がしてしまいます。

3度目に取り逃がしたあたりから大声で泣く息子の声が庭から聞こえてきました。何度も失敗する姿を見て、つかまえられないと思ったのでしょう。

最近は全力疾走をしていないので、息があがりくたくたです。私自身も諦めるタイミングを探ろうかと考えていた時、トノサマバッタの変化に気付きました。

3度目の失敗あたりから、疲労のためか飛距離が10メートルほどに短くなってきているのです。 次は6メートル、5度目になると数メートルしか飛べていません。

そこでようやくつかまえることができました。

息を圧し殺してトノサマバッタを両手でそっと包み込み、息子のところへ戻ると、大きな泣き声を聞きつけて庭へ出てきた妻にしがみついて泣いています。

そんな息子に手の中のトノサマバッタを見せました。

私　「これはなんだ？」
息子「……トノサマバッタ」
私　「お父さんはバッタが逃げたときどうした？」
息子「追いかけた」
私　「お前はどうしてた？」
息子「泣いてた」
私　「泣いてたら大切なバッタは戻ってくるのか？」
息子「（首を横にふる）」
私　「じゃあ、次に逃げたときはどうする？」
息子「お父さんみたいに高いところをピョーンて飛び降りる」
私　「…」

なんとなく伝わってはいたのでしょうが、息子の答えに妻と大笑いをしてしまいました。

きっと、諦めずに追いかけた姿よりも、普段は膝を気にして大胆なジャンプなどしない父親が飛び降りた姿の方が、息子にとってインパクトがあったのでしょう。

結果は私の思いとは異なりましたが、考えてみるとこの小さな出来事も日常の選択肢のひとつなのです。そう思うとやはり、福祉サービスを利用しながら在宅や施設で暮らす子どもや高齢者、障がい者の方たちは、日常の中で自分らしく生きるための選択肢をどれだけ持つことができているのかという疑問に行きついてしまうのです。

簡単に答えが見つかる問題ではありませんが、“より良く”することを目指して、今後も自身の日常を見つめながら、この大きなテーマと向き合っていきたいと思います。

CATHERINE

ゼミナールインタビュー

人間健康福祉学部　高杉 公人ゼミ

ゼミのテーマを教えてください。

高杉ゼミのテーマは「福祉のまちづくり」です。日本では、「福祉」と「まちづくり」は異なる学問として発展してきましたが、その両方の良さを活かしつつ、融合させて行う「福祉のまちづくり」の方法を学ぶことを目指しています。

現代の福祉は、対象となる高齢者や障害者が自分の住み慣れた地域で暮らすことが主流です。しかしそのためには、様々な人との「つながり」や「支え合い」が不可欠ですが、「無縁社会」とも言われる現代では、それが難しくなっているのです。そのような人々を支える「福祉コミュニティ」を作る方法を考えています。

一方、「まちづくり」側からは、都市計画や交通網整備といったハード面によるまちづくりが限界に達して、過疎化が進む地域が増加してきました。こういう地域では、「まちづくり」の課題も「福祉」の課題も同列で扱って解決を目指す必要があります。例えば、「災害」は今ではまちづくりのテーマと思われていましたが、過疎地では、避難所に逃げられない高齢者の避難支援や、避難所で医療や介護が必要な人はどうするかといった福祉問題も同時に発生します。このような「災害時要援護者支援」を考えるためには、「まちづくり」と「福祉」を融合させて、住民が主体となって問題を解決することが求められます。災害支援も含めて、福祉のチカラでまちを元気にするにはどうしたら良いのか、それを考えることもゼミの大きなテーマです。

ゼミの特徴を教えてください。

ゼミの特徴としては、「福祉のまちづくり」の理論だけでなく、フィールドワークを通じた多くの実践を行って、理論と実践とを結びつける訓練を行っていることです。過疎地における福祉のまちづくりの実践として、今治の鈍川地区玉川の「ふれ愛茶屋」という地域の拠点を応援するプロジェクトを行っています。高齢化の進む地域に、学生のチカラを地域に注入して元気にするにはどうしたら良いか考えています。7月にはその事前準備として地域のタウンウオッチングを行い「地域の宝物」をまとめてマップを作りました。このように、地域の「宝物」を活かして、どうやって地域を元気にするのか学生の視点から考えています。10月には介護福祉専攻の学生とふれ愛茶屋を訪問し、「フットケア」を行って地域の高齢者に健康になってもらう取り組みを行いました。

ゼミのスタイルを教えてください。

ゼミとしては、前期にまず「福祉のまちづくり」の基礎的な理論や技術を学び、後期にそれらをフィールドで実践するというスタイルを取っています。前期では、まず事例研究を行いました。「中山間地」「離島」「被災地」の3つの地域の事例をグループに分かれて調べて、地域活性化の方策を考えました。また、地域の人たちを巻き込んで地域活性化のアクションを促す「参加型開発手法」のトレーニングも行いました。マップ作りや写真を活用した自己開示の方法「フォトボイス」の方法を体験的に学びました。

後期では、実際にこれらの理論や技術を用いて、今治の「ふれ愛茶屋」の地域活性化の方策を住民の人たちと協働して一緒に考え、計画としてまとめる予定です。前期に地域の人々と「地域の良いところ・改善が必要なところ」を話し合った結果、「文化伝承」「災害」「空き家の活用」「廃校の活用」の4つがテーマとして浮かび上がりました。これらのテーマについて、学生が参加型開発手法を用いて住民と一緒に話し合い、具体的な実践計画を立てて、本当にそれらを実現させるのが目標です。

高杉公人ゼミはこんなゼミ

私たち高杉ゼミは、高杉先生のご指導のもと、今治市社会福祉協議会玉川支部と、同じく玉川町鈍川地区にある「ふれ愛茶屋」とともに、地域活性に取り組んでいます。

前期では、地域活性を行うために、参加型開発手法についての学習や、まちづくりの事例研究、玉川地域を散策し、人、文化、場所などについて学び、地域活性につながる社会資源を発見し、地域マップを作成しました。

ゼミのメンバーも明るく個性豊かで、和気あいあいとしています。また、ゼミのメンバーと先生で、行事の節目で食事に行くことや、遊びに行くことも多いです。

後期からは、フィールドワークやボランティアも多くなってくるので、より一丸となって頑張っていきたいと思っています。

社会福祉学科3年　長野　嵩

CATHERINE

ようこそ就職課へ

いざ、出陣!!

～変われ 変われ もっと変われ～

就職課長　井上 尚幸

一般企業の採用活動も後半戦になっています。本学は夏休みで学生の出入りも少なくなっておりましたが、それでも昨年に比べると、現時点での内定状況は好調です。また、夏休み返上で会社訪問をしてきた学生やきちんと休みを取ってきた学生といろいろですが、全体的に若干学生の行動が遅いと思われます。

昨年度は最終就職率が大学96.4％、短期大学部は100％とともに過去最高という数字でしたが、今年度は内定率だけでなく、中味を変えていこうとしています。

今年度前半戦の就職戦線の特徴として以下のようなことが上げられます。

第一に、銀行、信用金庫をはじめ大手損害保険会社の事務職など昨年とは異なった先での内定者が出てきています。当然のことながら、内定先のネームバリューよりも、学生の目指したい業種、職種での内定奪取のために就職課全員が学生の皆さんをサポートしておりますが、来年度以降、すなわち、現３年生にも大きく影響するであろうと思われます。

第二に、大学に直接送られてくる求人件数は８月末で、大学において昨年比112％、短大においては110％であり、学生は多くの求人の中から数多く選択できる状況であります。その結果８月末の内定獲得者数は大学では昨年同期比2.0倍、短大においては昨年同期比同数と非常に高い数字で推移しています。短大については、実習を終えこれからが本番となります。

第三に、学生への情報提供の手段として、従来は携帯電話を主としていましたが、今年度からは、メールでの対応を実施しています。求人先の情報提供や履歴書指導など幅広く迅速な対応を実施することで「質」の向上を目指しています。

第四は、本年度は本学においても重複内定者が昨年の1.5倍となっていることです。景況の回復を印象付けるものと考えることもできますが、来年度からの採用活動の変更ということで企業側に不安があり、今年度の採用を増やしている要因もうかがえます。

このように好調に推移している今年度の就職活動状況ではありますが、まだ多くの就職未定者が残っています。ただ未定者のうち専門職希望の学生が60％を占めており、彼らの就職活動は始まったばかりですから今後の就職内定には期待が持てます。

さて、第四の要因の中で、来年度以降の就職活動の変更ということに触れましたが、それについて簡単に説明しておきます。現在の４年生の就職活動は３年生の12月からスタート、４月１日選考開始、10月１日正式内定となっていましたが、現３年生からは３年生の３月からスタート、８月１日選考開始、10月１日正式内定となります。就活時期が３ヶ月後倒しとなり、企業の選考期間が４ヶ月短縮され、協定を結んでいる大手企業は２ヶ月で選考するということになります。非常に困難な状況であり、協定を結んでいない地場の企業は大手企業の対応の仕方に注目している状況にあります。地場企業によっては、来年の採用が困難と考えて今年度多少多めに採用している企業もでています。３年生の皆さんにとっては、のんびりできる時間が増えたわけではなく、就活に入るまでに十分な準備（公募型インターンシップへの積極的な参加など）を要することが必須ということです。

そのためには、自分自身をしっかりと見つめ直して、社会人として変わっていけるよう、より磨きをかけることが大切です。

「変われ 変われ もっと変われ!!」

教員著書紹介

読む力が未来をひらく ―小学生への読書支援

脇　明子 著／小幡　章子（聖カタリナ大学短期大学部助教　執筆担当部分：第10章「ボランティアでもできること」）
：岩波書店、2014年

本書は、児童文学者である脇明子が子どもと関わる現場の大人たちと交わりながら考案した読書支援の方法を、理論と実践の両面から語った一冊です。2011年刊行の『子どもの育ちを支える絵本』では幼児の生活と絵本の密接な関係について解明し、『自分を育てる読書のために』では今どきの中学生への本の手渡し方について提案しました。前作2冊をまとめる過程で見えてきた課題をふまえながら、今回いよいよ小学生への読書支援に光を当てます。

児童期は「大人に読み聞かせてもらう」ことから「自分で読む」ことへの、いわば絵本から本への移行期間であり、子どもたちは大きな飛躍を要求されます。その飛躍を促すために必要な読書支援とは何なのか、理論的に説明するとともに、絵本の読み聞かせや多読・速読奨励とは一味違う新たな手立てを提案します。後半は、脇の理論を現場で試みた小学校教諭や大学生、読み聞かせボランティアの実践報告です。筆者は、学童保育で子どもたちと関わった事例を中心にまとめました。短い絵本しか聞けないだろうとレッテルを貼られていた小学生たちが、全10回に及ぶ長い物語の読み聞かせを通して、聞く力と同時に生きる力もめきめきと育てていった事例など、物語の力と子どもの可能性に驚かされるエピソードが満載です。

権利擁護と成年後見制度（第2版）

山本　克司（聖カタリナ大学教授　執筆担当部分：第三章「日本国憲法の理解」）：みらい、2014年

『権利擁護と成年後見制度』は、新しいカリキュラムに基づく社会福祉士養成課程に対応するテキストとして、「みらい」から平成26年3月に出版されました。編者は、日本高齢者虐待防止学会等の学会活動を通して懇意にしている淑徳大学の山口光治先生です。私は、第三章「日本国憲法の理解」の執筆を担当しました。超高齢社会の到来とともに、認知症高齢者など判断能力が低下した人の権利擁護が重大な社会問題となっています。人々が安心して、自分らしく、自立した地域生活を営んでいくためには、当事者がもてる力を発揮するとともに、社会福祉士が当事者の「必要」と「求め」に応じて、側面から支援していくことが求められます（編者の「はじめに」より引用）。その際に必要なのが「権利擁護」の視点と方法です。この著書は、権利擁護の視点と方法を学ぶため、大きく3つの視点から執筆されています。第一は、相談活動に必要な法（憲法、民法、行政法）の理解です。第二は、相談援助に必要な成年後見制度と実際の理解です。第三は、社会的排除や虐待など権利侵害に対する権利擁護活動の理解です。私は、社会福祉教育において、軽視されがちな「人権・権利擁護・法的知識」の領域で、これを学ぶ意義を学生のみなさんが理解してくれることを願っています。

Amor et Veritas SCU
学校法人 聖カタリナ学園
聖カタリナ大学
カタリナひろば vol.27 No.1

編集・発行
広報委員会
〒799-2496　愛媛県松山市北条660番地
TEL (089) 993-0702 (代)
kouhou@catherine.ac.jp